

没後 36 年

土方巽

を語ること XI

"The 36th Anniversary
of Hijikata Tatsumi's Death:
Talking together
about Hijikata Tatsumi"

2022 1.21 金 21st January 2022

17:00 開始 20:30 終了予定 (16:00 開場)

慶應義塾大学三田キャンパス 北館ホール

事前予約制・参加無料・入退場自由

Keio University Mita Campus,
North Research Building
Reservation required, Admission Free

オンライン配信あり (Zoom Webinar)

ゲスト講話…

MARO Akaji

磨赤兒（舞踊家・俳優）



Information:

慶應義塾大学アート・センター 土方巽アーカイブ
TEL: 03-5427-1621 ishimoto@art-c.keio.ac.jp

主催：慶應義塾大学アート・センター
企画：慶應義塾大学アート・センター 土方巽アーカイブ
協力：土方巽アースト館、NPO 法人 舞踏創造資源、大駱駝艦



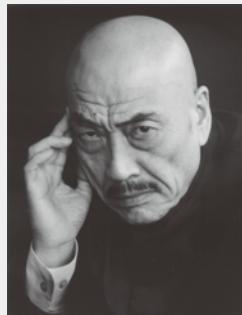
事前予約制（定員になり次第締切・オンライン配信あり）
予約方法の詳細は、アート・センター HP をご覧ください。
左記 QR コードからご確認いただけます。

- 会場を含むキャンパス内ではマスクの着用が必須です。
- 発熱や咳込み等の症状があるお客様は来場をご遠慮ください。
- キャンパス入構時に検温を実施しています。
- 37.5 度以上の発熱が確認された場合、ご来場をお断りいたします。

諸般の事情により、開催形態や内容に変更が生じる場合がございます。
必ず直前にアート・センター HP をご確認の上、お越しくださいませ。

撮影：鳥居良祥

提供：慶應義塾大学アート・センター / NPO 法人 舞踏創造資源



磨赤兒 MARO Akaji

撮影：白鳥真太郎

舞踏家・俳優。1943年生まれ。奈良県出身。20歳の頃に唐十郎と出会い、状況劇場に参加し、赤テントの舞台では欠かせない役者として人気を集め。1966年正月にアスペスト館に来訪して土方巽に出会い、以降は師として仰ぐ。1970年に映画「闇の中の魑魅魍魎」（中平康監督）で主人公の絵師金蔵を演じ、相手役に土方巽を指名して共演。

唐十郎の演劇論「特権的肉体論」を体現する役者であり、その風貌と所作から怪優としての存在感をもって活躍するも、1971年に状況劇場を脱退する。翌1972年に舞踏集団「大駱駝艦」を旗揚げ。ビショップ山田、天児牛大、大須賀勇、室伏鴻といった舞踏家たちが集結し、「天賦典式」を標榜して1970年代の舞踏ブームの一翼を担う。1973年に発表した「陽物神譚」では土方巽が客演し、土方巽の最後の舞台出演となった。

破天荒な発想、類い稀な実行力、卓越した統率力をもって、半世紀にわたり大駱駝艦を率いて舞踏の第一線を駆け、世界の舞踏を実現している。2021年にも、「ダークマター」（2月・世田谷パブリックシアター）をはじめ国内各地で公演を行い、10月にはフランソワ・シェニヨーとのデュエットで「ゴールドシャワー」（世田谷パブリックシアターほか）を演じた。

磨赤兒語録

そして唐突に「キミはヌスミグセはないかね」と冗談とも本気ともつかぬ顔で訊き、またジロリと俺を見据えた。／妙に正面に「あります」と俺。／「うん」と一言。しばし沈黙し、餅にキナコをつけて出してくれる。それを押し戴きながら、ああこれが音に聞こえた「ヒジカタタツミ」か、この大都会で何という田舎者風の姿、田舎の風景を纏った男なのだろう……。

東京に来て四年ほど、都会のスピードに翻弄され、ただただ、体力と嗅覚とカンだけをたより突っ走ってきた俺が、土方巽を前に、何やらホッとしているのだ。俺は一人っ子だが、何やら生き別れた兄貴に巡り合ったような気がした。土方さんの鋭い射すよう目の奥に、豊穣に広がる優しさがある。

（『磨赤兒自伝』2017年、『快男児 磨赤兒がゆく 憂き世 戯れて候』2011年改題）

そこで浮かび上がってくるのが私の師匠土方巽の言う「衰弱体」なる言葉だ。彼は57才で亡くなつたが、50歳の頃それを言い出した。これは彼が20年余、舞踏の考察で培ってきた延長としての総合的な方法論だと私は思っている。剣刀の様に鋭敏な彼の神経感覚は微妙な身体的異変を察知し、それを先取りするように形成されていった。それは土方巽が極私的個人の身体の衰弱体験だけに留まらないところが彼の舞踏哲学だ。ヒトの老い、衰えは寧ろ遍く与えられた舞踏への恩寵だと考えたのだ。

（『衰弱体』日経 2020年11月26日）



アスペスト館での記念写真（1976年）
左から、加藤郁乎、磨赤兒、土方巽、植村季弘

土方巽は「時」のターミネーターとして我々の前に《出現》し、我々舞踏家に栄光と悲惨を至福として与え給うた。／土方を信じるものは滅びるであろう、そして、土方を信じない者もまた滅びるだろう、ことを知れ。

（『肉体は野生の状態で存在する』フライヤー 1998年）

2020年と2021年は記憶に残る年となりました。時に交流の分断を余儀なくされ、時に活動の停止を促されたのです。舞台はもとより、さまざまな表現活動が制約を受けて、足踏みや退却を強いられた年でした。

この間、何ができるのか、何をすべきかを誰もが自らに問い合わせつつ活動の芽を育んでいたかと思います。2020年は事態に戸惑い思考停止があり、時に大きく退潮に甘んずることに陥る状況でした。それでも、2021年には、活動の根が広がり、表現への欲求や情熱がマグマとなって、しばしば噴出したと言えます。

この年2月には、笠井叡さんの舞台と磨赤兒さんの舞台を日をおかず続けて観覧できるという、舞踏ファンにとっては願ってもない僥倖にも恵まれたのです。その後も感染の大波に翻弄されながらも、舞踏の舞台は途切れることはなかったのです。

東京をはじめ都心部ではいくつもの舞踏公演が実施されました。クラスターもなくさほど混雑もなく劇場やスタジオに出向くことができました。しかし、一方では地方においてはフェスティバルやイベントが中止になるという事態を余儀なくされました。この揺れた状況に直面して、それぞれの地域の実情を見れば、その決定に従わざるをえないところでした。

土方巽アーカイヴでも、この2年間は異常な事態でした。入室を制限され、さらに閉室を余儀なくされる日々でした。例年、外国人のリサーチャーの来訪が多いのですが、国際的な交流が途絶えたため、外国人のリサーチャーも数少くなり、舞踏研究も停滞をするのではと危惧されました。

一方で、オンラインでの活動が顕著になりました。2021年の「土方巽を語ることX」もオンラインで、国内各地と海外を結んでの実施となったのです。オンラインでのイベント開催や録画映像のオンライン上映は有利な効果はありますが、やはり観客を目の前にしてのリアルなイベントに優ることはできません。とはいってもオンラインでの発表は、ハイブリッドも含めて、今後も追



土の土方巽像（制作：戸坂明日香）

究されるべきでしょう。

何ができたのか、何をすべきだったのか、舞踏家一人ひとりが思い起こして、また制作者や観客もまた振り返りつつ、新しい年の活動に生かしていくことを期待するばかりです。

*

2022年は土方巽の「疱瘡譚」から50年です。土方巽アーカイヴとしても、ぜひこのメモリアルな年にメモリアルな事業や活動を実施したいと考えています。本会でも参加者に問い合わせ、討議したいところです。「疱瘡譚」のテーマは、タイトルに含まれているように「病」です。根治されがたい病からの救済と復活を希求する舞踏であったといえるでしょう。土方巽が半世紀前にあって、舞踏を変革し舞踏で創造し舞踏に存在させようとしたのは何であったのか、この年に新たな問い合わせを提示しておきます。（森下）

土方巽「疱瘡譚」写真展

会場：北館ホール前
撮影＝小野塚誠



「土方巽を語ることXI」の開催に合わせて、小野塚誠さんが撮影された1972年の舞踏公演「四季のための二十七晩」の写真をイベント当日に展示します。どなたでもご覧になれます。